
おばちゃんのブルース

南 多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おぼちゃんのブルース

【Nコード】

N1471Q

【作者名】

南 多聞

【あらすじ】

小さな子を残して夫に先立たれた女性が、子供を生き甲斐に生きて行くも子供は離れてしまう半生を描きました。

突然の事故（前書き）

落語家・笑福亭仁鶴さんの「おばちゃんブルース」をモチーフに創作し、登場人物、連想される学校名、組織は実在とは関係ありません。

突然の事故

今日もこれでよし・・・と モップを片手につなぎの右袖で額の汗をぬぐった

ここはオフィス街の一角、高層ビルの狭間6階建ての茶色のビル
洋子はこのビルの掃除を始めて20年余り経つ

「オー ご苦労様」と背後から声をかけられた

「部長さん今日は早いですね」

部長の名は酒井という、洋子がここに勤めた前後に入社した。

「たまには早く帰らんな、家内の誕生日だからホテルのディナー予約してね」

「マーお熱い事で 部長愛妻家ですものね」

「ところで おぼちゃん涙の跡があるが どうしたんだい」

「いえね 息子が・・・」と言葉がつまった

「先日結婚したと喜んでいたじゃない」

二人は自動ドアを抜けて、道路を横切ると川沿いのベンチに座った
夕陽が川面にキラキラ反射している洋子は話し始めた。

今から25年前・・・

洋子は保育園に子供を送って行こうとした時リン・リン電話が鳴った
何だろう出掛ける前なのに

「ハイ原田でございます」

電話口の向こうから

「原田祐二さんの奥さんですか？」

「はい そうですか・・・」

「私は 原田君の上司で森田といいます、実はご主人が車の事故で
城北病院に搬送されました 私も行きますから奥様もそちらへ急いでください」

洋子は一瞬頭が真っ白になり膝が崩れ落ちそうになったが、気を取

り直して受話器を置くと子供を背負いタクシーを拾いに表通りに出た、なかなかタクシーが捕まらない何台目かやっと拾った。

「運転手さん城北病院まで急いで!!」

病院まで20分ほどだが長く感じる

「お客さん着きましたよ」

代金を払うと、駆け足で受付窓口へ行った。

「すみません 今救急で入院した原田の家族ですが部屋はどちらでしようか？」

「西病棟の集中治療室です、この左側の突き当りを右に曲がってエレベーターで5階です」

エレベーターを降りると、正面に治療室はあった入口の右手に背広姿の男性と警官が立っている洋子に寄ってきた。

「原田君の奥さんですか？ 森田と申しますこの度はとんだことで」

「先ほどは電話を頂きありがとうございます、で主人はどのような・」

すると警察官が

「目撃者によりますと割り込みを避けようとして陸橋の欄干にぶつかったようです、相手の車はそのまま走り去って行きました、奥さん先ずは、ご主人の名前・生年月日を・・・」

警官は一通り事情聴取を終えると

「詳しくは後日また伺います本官はこれにて」

「どうも ありがとうございます」

一礼をして森田の方へ振り向いた。

「森田さんお忙しいのにすみません、わたしここにいます何かありましたら会社に連絡させていただきます」

「そうですか後はよろしくお願いします 社として出来ることはご相談ください」

治療室前の椅子に腰掛けた3時間ほどしたであろうか、扉が開き医者が出てきた。

「奥さんですか全身打撲の危険な状態です出来る限り手は尽くして

います、こちらへどうぞ」

治療室へ入ると酸素呼吸器を着け寝台に横たわり顔が腫上がった祐二の姿があった。

シューパー シューパー 呼吸器の音が冷たい病室に響く

何時間経ったであろうか薄目を開け気が付いたようだ。

「あなた 大丈夫でしょうか」

祐二は気が付いたのか洋子の方へ首を向けると頷くように顔を傾けそのまま動かなくなった

「あなたー 祐二さん 祐二さん!!」

医者はAEDを取付け心臓マッサージを始める、しかし祐二は反応しない。

「まことに残念ですが 11月20日午後11時5分」

医者は手を会わせた。

「祐二さん 祐二さん」

洋子は動かなくなった祐二の両手を握りしめ続けた、まだぬくもりが残っている

深夜、自宅へ祐二は無言の帰宅となった。

洋子は養護施設で育ち身寄りはいない、祐二の親もこの結婚に反対だった祐二が洋子を両親に紹介した時

「親が分らん娘と内の息子は一緒に出来ん」とさげすまれ、以来駆け落ち同然に家を飛び出し所帯を持ち、結婚式も挙げず来年は子供と共に披露しようとしていた矢先の出来事だった。

坂道 照る日 曇る日（前書き）

母としての意地を通すが、子供は父親が居ないと事を気が付き始める。

坂道 照る日 曇る日

葬儀は祐二の両親、洋子と2歳の息子祐太だけで行い密やかに終わった後祐二の父親が口を切った。

「洋子さんだったね これからどうします 祐太だけは引き取ってもいいが・・・」

まだ両親は洋子を認めていなかった

「いいえ、それでは祐二さんに怒られますから自分で育てます」

洋子にとって祐二は自分にやすらぎ与えてくれた唯一の人であり、その子を手放すのは身が切られると同じである。

幼子を抱えてはフルの仕事はない、洋子は昼はスーパー・早朝・夕方はビルの掃除と働いた。

祐太が5歳になった時のことである、保育園で父の日の催しがあった。

行事が終わって祐太は洋子にきいた、

「なー お母ちゃん よそはお父ちゃんが来るのになぜうちはお母ちゃんなんや」

「祐ちゃんな お父ちゃんは遠い所に行ったから来れんの だけど祐ちゃんのことは ちゃんと見てるよ」

「ふーん そうか 見てるんやな どこから見てるかな」
「あの星からかな」

宵の明星が西の空にうつすら輝き始めている

「お父ちゃん 祐ちゃん今日もいい子してたよ」
星に叫ぶ祐太であった

「祐ちゃん お父ちゃんわかったって ほらキラキラしたでしょ」
祐太も小学校に上がる年になった、机は無理でもせめてランドセルは揃えてやりたい。が、生活は苦しい百貨店のウィンドで入学コーナーを見るも出るのはため息ばかり。

その時後ろから声をかけられた、声の主は掃除しているビルの社員

で名を酒井という、洋子がこのビル掃除を始めた時期に入社してそんな縁でよく話しかけてくる。

「おばちゃん 溜息ついてどうかしたんですか」

「いえね 子供が小学校に上がるのにランドセルを見てるの」

「もう息子さん小学校早いね どれが似合うかな」

「これくらいかな でも とてもとても・・・」

ドッシリした黒の光沢のあるランドセルを指差した、酒井は洋子が母子家庭であることは知っている。

「おばちゃん入学式までまだ日があるね まだ買うの待ってなよ」
「ん？ とても買えしませんわ」

本気とも冗談ともいえぬ表情でにこりとした。

それから一週間後洋子が掃除を終わりにかけた時、酒井が5人の同僚と共にエレベーターから出て来ると洋子に近付いて来た。

「お疲れさま今日は皆さんお揃いね これから飲み会ですか」

「おばちゃん これをどうぞ」

あの百貨店の包装で30cm角ほどの箱を手渡した。

「まさか これは！」

「先日おばちゃんが眺めてたランドセルだよ 課の連中と相談して息子さんにプレゼント」

「こんな事して頂いて何とお礼を申し上げようか・・・」

「おばちゃんが笑顔でご苦勞様と声を掛けられると、みんな仕事が順調にいくんだよ おばちゃんの頑張りには課でも噂でね そんな気持ちでの感謝です受け取って下さい」

洋子はランドセルを受け取ると深々と頭を下げた。

子供のイジメ (前書き)

祐太はイジメにあうが、母としての洋子は

子供のイジメ

祐太が小学校4年の時だった、ランドセルに傷がつき服も泥だらけで帰ってきた。

「祐太 どうしたんだい こんなに泥だらけになって」

「んーん 何でもない」

「何でもない事ないやろ お母ちゃんには話して」

祐太は重い口を開けた

「お母ちゃんがな ビルの掃除で汚ない子供とみんなが言うから喧嘩したんや」

「働くのにキレイも汚ないもあるもんか 明日休みやから お母ちゃんとおちめてやる」

校門の南に小さな公園がある、洋子は下校時間にその公園にある松の木陰に身を潜めていた、祐太が出てくる後ろから三人の男の子が何か叫んでいる

「ヤーイ ヤーイ 掃除ばばーの子 クサーイ子供」

石を祐太に投げつけた。

洋子は子供たちの前に立ちはだかると

「コラーお前たちか祐太のランドセルに石ぶつけたのは！！」

子供たちは頭を下げうなだれている

「いいか 掃除せんとな あんたらも真っ黒になるんや 掃除する人がいるからキレイに生きてるんや」

「・・・」

「もう一度言ってみ これだけでは済まさへんで」

子供たちは下を向いてはいるが、ペロツと舌を出している。

洋子は祐太と並んで帰りながら言った

「祐ちゃん これからがあんたの勝負やで 三人相手では力で負ける あんな声ほつといて逃げや 追うのを諦めるまで逃げまくるのや 逃げるのも勇気いるで」と言っていてクスリと笑った。

「お母ちゃん 何 笑おうてるの？」

「いえな、祐太のお父ちゃんやったらこんな時どうしたかな、お父ちゃん剣道部だったさかい『一人二人は面倒や三人四人は多すぎる サー束^{たば}になって掛かって来い と言って逃げよ』と祐ちゃんに言うだろなと想像したら おかしくってな」

「フーン お父ちゃん剣道やってたんや」

家に帰ると祐太はいつものようにハーモニカを吹き始めた。

♪ 夕空晴れて 秋風吹く 月影落ちて 鈴虫鳴く

祐太が陽気な時に良く吹いている故郷の空である。

洋子が裕太に小学2年生の時買って以来毎日吹いている。

担任の教師が家庭訪問の際、祐太は音感がいいからピアノかバイオリンを習わせるよう勧められたが家庭状況では夢の又夢である。

「祐ちゃん今度楽器の演奏会があるってな 祐ちゃん出るの」

夕食の用意をしながら流し台に向いたまま聞いた

「先生から最後に演奏しなさいと言われてんねん」

「そう お母ちゃんその日は休めないからごめんね」

演奏会の日になった、最後の祐太の演奏が始まる曲目は故郷

♪ うさぎ追いし かの山 小鮒釣し かの川

一番を演奏し終える頃、ざわざわした会場も二番が始まるとシーンと静まり返った。

♪ いかにいます父母 つつがなきや ともがき

それは澄んだ音色と独特の淋しさが会場内に響き渡る

父母の中にはハンカチで目を押さえる母親もいる。

演奏が終わり講堂内からどこからともなく、パチ パチそしてパチパチパチパチ拍手が鳴り止まない。

雪解け　そして春　（前書き）

祐太の演奏の後、待っていた人物がいた

雪解け そして春

祐太が講堂から廊下へ出た時、老夫婦が呼び止めた。

「祐太じゃね 原田祐太じゃね」

「僕はそうです、お爺ちゃんは？」

「わからんのもあたりまえやな 裕太は憶えておらんわな、お母さんは元気か？ 帰ったらこれをお母さんに渡しておくれ」と言うと祐太を抱きしめ、箱を祐太の手に乗せた。

「ただいま」

「お帰り上手に吹けた？」

「先生ほめてくれはってな、いっぱい拍手もろた」

「よかったな、これで祐ちゃんもあの三人組に馬鹿にされんな」

「それと お母ちゃん知らないお爺ちゃんとお婆ちゃんがこれをお母ちゃんへ・・・て」

祐太はランドセルの奥から箱を出すと、箱には更に小さな箱が2個と手紙が入っている、何だろうと封筒を開けた差出人は祐二の父親であった。

「洋子さん祐太を良くここまで育ててくれた お礼を言います、箱には祐二が用意した結婚指輪が入っています。祐二が家を飛び出したので家に置いたままになっていました、来年の正月には祐太を連れて遊びに来なさい。 淳一」

淳一とは祐二の父親である、箱を開けると七色の輝きが洋子の顔を照らす。洋子は祐二の写真に結婚指輪を置き、もう一つの指輪はめ手を合わせる。

あー お父さんがやっと私達を認めてくれはった・・・。

洋子の目に涙が止めどなく溢れた。

洋子はあの時父親に罵倒はされたが、祐二の死後も時の挨拶の便りは出し続けた、が、返事が来ることはなかった。今回は祐太が10

歳になったこともあり晴れの舞台を見てもらえたらの思いから演奏会の案内を出していたのだ。

春うらら (前書き)

中学生になった祐太と母の或る日

春うらら

祐太は中学生になった、ハーモニカで褒められて以来成績も上がっていった、一つ認められると人は自信と成るようだ、それまでは中の成績が中学に進級する頃にはトップクラスになっていた。

祐太の家は西向きの5軒長屋で道路から路地に入ると2軒目になり、玄関の引き戸までに1畳ほど土間がある。裕太は学校から帰ると土間に置いてある縁台でいつもハーモニカを吹いて母の帰りを待っている。中学の入学式も終わったある日、長屋の住人で50代半なかばの男が裕太に話しかけた。

「おう祐ちゃん中学になったんか、勉強よう出来るんやとな向かえのおぼちゃん褒めとったで、おっちゃん勉強のこつ教えたるわ競馬が勉強には一番やで」

男はいつも競馬新聞を持ち耳には鉛筆を挟んでいる。

「おっちゃん 競馬が勉強と何の関係があるんや」

「ええか勉強の三拍子は読み書き算盤やな、競馬新聞を読む、本命・穴馬・対抗馬をこうして書いてな 配当予想して単・複・流し買にするか計算するんやで 三拍子揃っとるな」

「ふーん おっちゃん偉いんやな」

「それとな馬券は正式には勝馬投票券といってな、ありがたーいお札ふだやで 当たれと押んでな」

「おっちゃんの券は勝ち馬やのうて負け馬投票券やな、いつも負けたとってはるんやん」

「このガキ言いたいことぬかしよって、ほんでも今日は勝馬投票券になったで ホレ チョコレートあげるわ」

「ありがとう、おっちゃん今度も勝馬投票券買いなんよ」

洋子が帰って来た

「おっちゃん いつもありがとね息子に変なこと吹き込まんといてや」

「へいへい・・・」頭を掻きながら奥へ行った。

母子は玄関を開け家の中に入った。

「お母ちゃん部活やけど中学にハーモニカを演奏する部が無いんや、あのおっちゃんが言うには『逃げて勝てる部がええで』と言って、何やそれと聞いたらな『競馬とラグビー』と言うねん、お母ちゃんどうやる?」

「おっちゃんらしいな、けど妙に説得力あるなー、自分がこれと思う部に入ったらいいで、さすがに競馬クラブはないやろ」

「お母ちゃんが『逃げまくれ』と小学校の時言ったやろ、あれから走るの速うなって1月のマラソン大会は校内で入賞したで」

「そうかいジメも役立つことがあるんや」

「それんな ラグビーはジャージとトランクスにヘッドギアだけの用具やろ、家計にも優しいでゝす」

祐太は両手を合わせ右頬に当てると首を下へ傾ける仕草をしておどけてみせた。

「家計に優しいは余計なお世話や」

祐太はラグビー部に入った、2年になるとタックルをかわし飛び込んでのトライに益々磨きがかかる、『逃げの祐太』の異名を取りチームもここ一番の勝負時は祐太にボールを回し対戦相手を恐れさせた、3年には生徒会長にも選ばれた。

分水嶺（前書き）

高校の進路で母子は対立する
が・・・
酒井より意外な申し出に
洋子は

分水嶺

やがて進路を決める時期が来た。

「お母ちゃん 明日進路相談があるんやけど 俺、高校行かずに就職する・・早う働いてお母ちゃん楽さしてやるねん」

「アホ！！何言っとるねん、お母ちゃん高校行かせるぐらいはある、余計な心配せんでええ！！」

洋子は祐太を怒鳴りつけた、彼女には過去の苦い記憶がある。

「ええか お母ちゃん中学出やる社会出て高卒の人より仕事出来てもな『あの娘は中学しか出てへんのかな』と白い目で見られるんや、お母ちゃん悔しくてな簿記1級取ったり英検も2級取ったんや、それで履歴書もって就職しようとしても、面接で人事の人から本当に持つてるのか？と上目づかいで見られるんや、せめて高校は出とき」洋子の目には涙が浮かぶ、祐太はそんな母を初めて見るのであった。

「うん わかった」祐太は机に向かった。

進路相談の日

「先生いつも祐太がお世話になっております」

「どうぞ こちらへお掛け下さい」

教師机の前の椅子に祐太と二人は座った

「それで先生、祐太はどの学校なら入れますねん？」

「そうですね この高校はどうでしょう」

教師が示したのは県下有数の進学校だった洋子はびっくりして

「先生、この学校は大半が国立へ進学する学校じゃおまへんか」洋子はパート仲間に同年齢の子が居たこともあり、それなりに高校の話は聞いている。

「お母さん、息子さんの成績ご覧になったことは？」

「通知簿だけは見てまっけど・・・」

「これが、ここ一年間の成績です」祐太は校内で1，2位であった

「ところがお母さんね、祐太くんは就職希望を出しましてね、ここは祐太くんの将来のためにも進学するように、お母さんから進学を勧めて下さい」

「昨夜、祐太と相談して進学するようにしましたけど・・・」

「これで決まりですね、祐太君なら推薦で進学は可能ですから手続きを進めましょう」

「よろしゅうお願いします」

お辞儀をして返事をしたものの、高校までの用意はコツコツ貯めていたが大学までの話しは予想外であった。

あの話しを受けとけばよかったかなと今更後悔している。それは一年前洋子がいつものように朝、ビル掃除していた時のことである会社の受付に一人の外人が受付嬢に何か話しているが通じないのか声を荒げかけた、洋子は受付に近づくこと

「チョット話しに割り込んですみません、この方は酒井課長に取り次いで欲しいと言うてはります」

受付嬢は慌てて電話を取り酒井を呼び出した。洋子が外人と何か談笑している光景を、酒井はエレベーターを降りて受付カウンターに向かつて来る時見ていた。この会社はアメリカに事業展開して行くとして、その提携先の来客であった。

それから数日後、洋子は酒井に仕事の後2階の応接室に来るよう言われた。ノックして部屋に入ると酒井と人事課長が待っていた。

「失礼します、何か私に手違いでも？」

「おばちゃん、いえ原田さん先日アメリカ人の客が来たね、その時会話してたでしょ、名はジミーと言うのですがジミーは私に疑問を投げかけましてね『君の会社はジョークを理解できる人を掃除に回して、話の通じない人を受付にしているのか』とね」

「すみません余計なお節介しまして」

「それを人事課長に話したら、社員として入らないかという事になって課長に来てもらったんだ」

「あらためまして人事の横沢です、原田さんのことは酒井君からよ

く聞いてます、英検2級をお持ちだそうで」

「そんな お恥ずかしい、いつもお顔だけは拝見してます改めまして」

すると酒井は「当社は海外事業を準備していてね、英語に堪能な特に女子社員を採用しようと云った段階なんだ」

「そこで労働条件はこうですが出来るかどうかの相談です、了承なら部長に採用可否の稟議書を回します」

「横沢君の書類は部長に信頼厚くてね、まずOK間違いないよ」

「息子と相談させてもらっていいですか？」

洋子は書類を受取ると立ち上がり一礼して応接室を出た。

母のプライド（前書き）

洋子は裕太の将来のため収入を取るか、健やかな成長を取るか悩む。

母のプライド

書類の内容として給料は今の昼・夜働くより倍以上になるのは魅力だが泊り込みの研修が1ヶ月ある、夜の接待の通訳として同席することになる。研修期間は祐二の両親に頼むとしても夜の同席が引掛かる。

「祐ちゃん こんな相談やけど」今日の出来事を言った

「給料倍になるんやろ、行ったら」

「お母ちゃん自分は酒飲めんけど、よその男と酒の席出てもええんか、帰ってくるのが夜中になるかもしれんで」

「んーん それはチョット・・・」

「そうか祐ちゃんが んーではお母ちゃんこの話し断るわ」

中学2年になると変声期も終わり異性に関心を抱く頃である、多感な時期の子を持つ母親としては考える洋子である。

「お母ちゃん僕が働くようになったらその仕事やってもいいで」

「お母ちゃんその頃にはいくつになってんねん、誰も相手にしてくれんわ」

「それもそうや」

「こら こんなとこで相槌うつな お母ちゃんはまだまだ捨てたもんやないで なーお父ちゃん」

祐二の写真に向かい右手をくの字に曲げ手の平を後頭部に置くポーズした洋子であった、夜も更けた6畳の茶の間に母子の笑い声が響く。

翌日、酒井に辞退の申し出を伝えた

「酒井はん折角のお話で申し訳おまへんが、今のわてには無理ですねん」

「そうでしょうね、私もあの条件を見ておぼちゃんの性格から辞退は予想してました横沢に伝えておきます。それと辞退したからと言っても掃除の仕事は続けてくださいよ、この話しは横沢と私しか知

りませんからね。横沢もこの件でおばちゃんをパート契約を解除するような課長じゃないから気にしないでいいよ、おばちゃんの朝の笑顔が会社を明るくしてるからね」

「重ねがさね お気を使わしゅうて頂きありがとうございます」

その酒井もアメリカの営業所長として転勤して行った。

洋子はやっぱり私はお掃除おばちゃんだ、心だけはキレイな掃除をして来た。

3年先の事考えてもしようがない、その時はその時だ何とかなるやろ、今まで何とかなるやろで生きて来れたんだから・・・。

祐太の高校入試の合格通知が来た。

青春賛歌（前書き）

高校生活は驚きと新鮮さが待っていた

青春賛歌

祐太ら新入生は入学式の洗礼を受ける、講堂で新入生と上級生の対面でお互い全員向き合い、先輩から「オッス!!!」と大声を掛けられる、新入生は呆氣に取られ小さな声で「おす」先輩は「声が小さい、もう一度!!!」と何度も繰り返す。

この学校は文武両道が校風であることを校長の挨拶で知った。男女共学とはいえ女子生徒は2割もない、男子校なみの洗礼であった。クラス編成の説明を受けて教室に入る、担任の開口一番

「君たちの担任の山口です、既に一学期分の予習はやって来たはずだが、一週間後から毎朝授業前に小テストを始める。いいな覚悟して置け」

祐太は中学との違いに驚くばかりの一日であった。

翌日、授業が終わると校門までの道路には各クラブの勧誘が並んでいる、クラブ活動は義務化されていてどこかの部に所属しなければならぬ、祐太はあれこれ案内を見ながらラグビー部の受付の前に来た。

「失礼します、今回入学した原田です。入部の案内を伺いに来ました」祐太と身長は同じ位だがガッチリした体格のラグビー部員の男子生徒と丸顔のポッチャリした女子生徒が受付にいる。

「オー 君が原田君か待ってたぞ、俺はラグビー部のキャプテンで宮崎」

宮崎は受付テーブルを回りこむと、いきなり握手してハグの歓迎をされた。

するとすかさず女生徒が「私ラグビー部のマネージャーの香川よろしくね、ここに入部の申込みを書いてちょうだい」と微笑みかける。

「は、ハイ」

祐太は勢いに圧倒され有無を言う間もない、二人は顧問の教師から祐太の事は聞いていた勧誘は至上命題である歓迎を受けるのも領け

る。だが歓迎もそこまで、翌日から中学とは比べ物にならない特訓が始まる、祐太には驚きの高校生活が待っていた。

ラグビー部の部員は男子30名余り、ここに新入生が23名入部した、内二人は女子生徒である。練習時間は授業後平日2時間土曜3時間までと決められている、それでいて県大会ではベスト8にいる、その鍵は女子部員にある事が後に解る。

祐太等は授業が終わると一目散に部室へ駆け込み着替えた後、先輩を待つ先輩より遅れると、グラウンド5周のランニングが課せられるのだ。新入生は揃うと「今日もよろしくお願いします!!」と声を張り上げる。その後各人は組と名前の発声をする「1年C組原田祐太!!」「先輩が「ヨシッ」と言うまで何度も繰り返す、ランニング、ラグビーの基本練習とこなして行く。女子生徒は1、2年生で4人いる彼女等は男子のモチベーションをアップとしての役目がある、バテかかった男子に水やらタオルを差し出しては「頑張ってな」と笑顔で声をかける、ところが練習を手抜きすると「われー それでも男か! ちゃんとせんかい」と豹変する。柔剛取り混ぜた女子部員の激励は単細胞の男子には効果抜群である。

土曜日は通常練習の後、部室で応援歌の合唱と称した春歌を先輩から教えられる。1年の女子部員は初めは顔を赤らめて下を向いているが、夏休みの合宿の頃には合唱こそしないが平然としている。部長の宮崎始め2年生部員が音頭を執り安達明がリリースしていた「女学生」をイントロに歌い始める

♪「薄紫の藤棚の 下で歌ったアベマリア 澄んだ瞳が美しく・・・君は可愛い女学生」に続いて「アソーレ」

「向こうと通るは女学生 3人並んだその中で most beauty が目に付いた

色は white 目はパチリ 口元キリリと紅色の溢れるばかりの愛らしさ

僕の wife にするならば もっとたくさん勉強して

東大京大またにかけ 5年10年また5年

やっと大学出た頃にや あの花は誰かの妻だった」

その後は春歌のオンパレード 「一つ出たホイの・・・」

祐太は1年ながら秋の公式戦のレギュラーを取る、対外試合の対戦相手が決まると女子部員がより忙しくなる。入部の時受付にいた香川と今年入った守口一恵が組んで対戦相手のデータ収集が始まる、顧問の教師はそれを基にフォーメーションの実践プログラムを立てる。作戦会議は女子部員も加わり彼女等はこの体験を通じて、社会に出ると女性社長やら管理職になる人材となっていく。そのためラグビー部へ希望者は女生徒が少ない割に抽選になるほどの人気である。

秋の大会、明日はベスト8進出が決まる大事な一戦、一恵は祐太に言う

「原田君、観客席から祐太と叫ぶから頑張ってね」

彼女は祐太の弱点、試合時間の残り5分で集中が途切れるのを知っていた。試合スコアは15対13 裕太の高校はリードされている、その残り5分「祐太ー!!!」一恵は黄色い声で叫んだ、裕太は持ち前の逃げの祐太を発揮し1人2人3人とタックルをかわしゴールラインへ飛び込み「トライ!!!」の声がグラウンドに響き渡り、ノーサイドのホイッスルが鳴る、5点が加わり逆転トライとなった。祐太は部員から頭をパンパン叩かれる祝福を受ける。

試合後、一恵は祐太に聞いた

「ネー原田君、私の声届いた？」

「守口さんの声は特徴があるやん、聞こえた」

「どんな特徴なの？」

「おばちゃん声やねん」

「このやろー、今度から応援しないぞ!!!」

一恵は祐太をグラウンドで追い回す

「ゴメン ゴメン」と祐太は逃げる、ここでも祐太は追われる運命のようだ。

進路選択（前書き）

祐太は大学への進路選択に父祐二の面影を求める

進路選択

祐太の高校1年は慌ただしく終わり2年に進級する、大学の希望学部によりは理系か文系の選択時期になり、祐太は数学・物理が得意である迷わず理系を選ぶ。

家で選択希望の書類を書きながら台所の母に父の仕事を聞いた、

「お母ちゃん お父ちゃんはどんな仕事してたん？」

洋子の夫は工作機械の工場に勤めていた、その中の電子回路設計の部門にいた、洋子は組み立てラインに結婚するまで同じ工場にいた。洋子はタオルで手を拭きながら食卓に座り

「お父ちゃんはな高校は職業高校で電子科やったな、回路図読むのが得意でな、そりゃ偉い人やったで、入社して3年目の時や大学出の人の設計した制御基盤の図で生産準備してた時、お父ちゃん図面見てな設計課長に『課長この回路、計算ではあってますが、この仕様の部品では約1500時間前後に発煙します』て言うたんや、初めは誰も信用しなかったそこでお父ちゃんは時間と共に変化する式を書いてな説明したんや、これで皆納得してな、ここからがお父ちゃんのすごいことや、部品の仕様を変えると納期に間に合わん、部品の組合せを変えた回路にして完成させたんや。

それから高卒やけど大学卒の研修所に行くことになって大学で2年間分のカリキュラムを3ヶ月でやるんやて、毎日夜が白むまで勉強したそうや、その時研修員が40名ほど居たそうやが、お父ちゃん一番で研修を終えたんや。会社から帰ってからも回路図の図面引く姿はかっこよかったで」

洋子は机の上で線を引き、時折立ち上がって壁に貼ったボードに計算式を書く祐二の姿が浮かんでいた。

「お父ちゃんスゴイ人やったんや」

祐太が初めて聞く父の姿である。

「そうそう、お父ちゃんが書いてたノートがあったはずや」

タンスの横の本棚から古い大学ノートを取り出し祐太に渡す祐二の亡くなった後も掃除はしているが本棚はそのままにしてある。祐太はページを繰って行く、回路図のメモに祐太が見たことも無い数学の計算式、方程式でビッシリと書き込まれている。祐太の目は或る回路の名称に釘付けになる。

「お母ちゃん、この微分回路、積分回路で何やろ」
微分、積分は学校で習い始めた。

「それはな、お父ちゃんが一番気に入ってた回路や、お母ちゃん詳しいこと知らんけど、

いつも『シンプルで美しい回路や、それに哲学がある、微分かすかにかったところで分かった積つもりになる。だから微分積分て云うんや』てな。お父ちゃん仕事のこと何も言はへん方やったけど、これだけはお母ちゃんに教えてくれはった」

「お母ちゃん、俺お父ちゃんと同じ工学系にする、このノートが読める様になってお父ちゃん考えていた事知りたいねん」
写真でしか会えない父の面影を祐太は知るのである。

志望校に向かって、そして受験（前書き）

祐太は大学の受験日思わぬ行動を・

志望校に向かって、そして受験

ラグビーの部活動も秋の公式戦が終わると祐太ら2年生は活動から事実上引退となる、その追い出しコンパの後、祐太と一恵は進路について話していた。

「原田君の志望校はやはり、T大またはK大？」

「T大だと下宿になるよってK大やなく、ここなら自宅から通えるやん」

「守口さんは？」

「お父さんは地元で通わしたいみたい、下宿なら女子大しかダメだって」

「そうや、俺が君の父親なら離したくないやん」

「それってもしかして私へのプロポーズ？」

一恵は祐太の顔の下から悪戯っぽい目をして覗き込んだ

「う、あ えーと ○×☆♂♀※」

「わー 赤くなってる」

「つつ つまりだな 俺がもし君の父親ならばの仮定の話しやって」祐太は額が汗でびっしょりになった。

一恵も17歳少女から女性に成り掛けている、祐太がチームメイトから女性を意識しだす頃であり、一恵も祐太を男子から男性を感じ始めている。

「これで決まりや、俺はK大 一恵はT女子大」

二人は向かい合って右腕を前に出し右手を重ねると異口同音に

「志望校に向かって ファイト オー！！」

重なった手を上げた。

追い出しコンパが終わると、学校に昼・夜と弁当が2食持参して登校する。授業の後、補習、模擬テスト、更に自習と祐太ら生徒は学校に夜8時まで勉強の日々である。

帰宅して入浴もそこそこに祐太は机に向かう、洋子は0時頃までは

起きている。軽めの夜食を準備した後

「祐ちゃんお母ちゃん先に休ましてもらうね、早く寝てな」

「うん、もう少しケリがついたら」

祐太の家は2間と台所である、洋子は祐太が高校生になると4畳半にある食卓テーブルを片付け洋子の寝室となる、隣の6畳間の窓に向かつて机がある。

洋子が時折目を覚めると、間仕切りの襖の間から夜中の2時過ぎても明かりが漏れていることもある。正月も夏休みも登校して自習である。

洋子は祐太の夜食を用意するまで、昔習った簿記・英検のテキストを開けては勉強し始めた。やがて1年余りが経ち受験シーズンとなった、祐太は第1志望のK大のみ受験する。

いよいよK大の入試日、朝起きると食卓に新聞が開き放しになっていた、いつもお母ちゃん片付けて仕事行くのになど、新聞に目を通すと求人欄に○やら×やら書いてある。

祐太は家計厳しいんやなと感じるのであった、国立とはいえ高校の授業料の何倍もかかる。

受験会場のK大に着き受験番号の教室へ入室する、ピーンと張り詰めた空気が教室内に溢れている。問題集が配られ「始め！」合図が出る、最初の科目は数学、祐太の得意科目である、なんとか解答を書き終えた。

2科目は現代国語である問題用紙に答を書いて行く、解答用紙に転記しようとした時、祐太はふと手が止まり転記をやめてしまった。同様に翌日の日本史、英語も解答欄を白紙にした。最後の科目、物理は解答欄に転記した。この時代は5教科での試験である、いくら数学・物理が満点であろうと残りが白紙では合格できない。

祐太は2科目の時、朝の新聞が脳裏をかすめていた、そういえばお母ちゃん昔の簿記やら英検のテキスト見てたな、2科目以後白紙提出を決めた、しかし得意の物理はさすがにプライドが許さなかったようだ。

合格して辞退の選択も有る、お母ちゃんのことや「余計な心配せんでええ」と言われるに決まってる。

しかし無い袖は振れぬ、いろいろな雑念が頭を駆け巡る。裕福でないで行きたい学校も行けない社会に憤慨を持ったのか、或いは17、18歳は反抗期でもある、父と母両方を頑張って働いてきた母親に反抗は出来ない、その鬱積した感情の発露としたのか。

大学での奨学金、或いはアメリカ留学において審査合格し成績によつては大半の授業料生活費までも返済義務不要の奨学金を得る制度も有る。

しかし洋子は人に頼らない生活をしてきた、彼女に助言する人が居れば裕太はこんな常軌を逸した行動はするまい。しかしこの行動が一恵に知られてしまう。

洋子は昼のパートから帰って来た、まだ祐太は帰って来ていない玄関を開け茶の間の新聞を見て背筋が凍った。まさか、あの印を裕太に見られたのでは・直ぐ新聞を丸めるとゴミ箱に捨てた。

「ただいま」祐太が帰って来た。

「お帰り、どうだった」

「ちょっと難しかった、合格は無理かなー」

洋子はその顔の表情がいつもと違う、テストが出来ない時は悔しさを滲ませる、それが今日は能面の様な表情をしているのを見逃さなかった。

「そうか、でもあれだけ頑張ったや大丈夫やて」

母子の会話はそれで終わり、沈黙のまま祐太の試験は終わろうとしている。

この事が洋子、祐太の溝の始まりであろうか、母子には知る由もなかった。

嘘と真実（前書き）

祐太の常軌を逸した行動に、一恵は怒りと悲しみをぶつける。

嘘と真実

合格発表日祐太の番号はない、それでも、もしかしてと思いつつ掲示板を虚ろな目で眺める、やはり無い当然である。掲示板の周囲では歓声、胴上げして合格者を横目に見ながら結果報告を高校にと向った。教師に一応の挨拶を済ませて職員室を出た時、一恵と出会った。

「祐太くん、私先生へ報告して直ぐ来るから待ってて」
ほどなく一恵は小走りで掛けて来た。

「お待たせー 祐太君どうかしたの 意外だわ」

「一恵はおめでとうやね」

「ちよつと話したい事があるから来てくれる」

二人はラグビーのH型のゴールポストに来た、祐太はポストの柱にもたれている、一恵は話を切り出した。

「わたし妙なこと聞いたのよ、部の先輩の香川さん知ってるよね、先輩祐太くんが先日受けたK大に去年入って大学の事務局でバイトしてるの」

「香川さんと君がどうかしたんや」

「先輩から昨日電話が来て、数学・物理は満点に近い得点なのに、後の科目を白紙で提出した人がいる、どうも祐太くんらしいの、それ本当？」

祐太はまさか一恵が知るとは露にも思わなかった。

「・・・・・・」 祐太の顔は曇った

「やはり 本当だったのね」

「んーん 本当や」力なく答えた

一恵は祐太の母を尊敬していた、生活は苦しくとも母、妻、女としても誇りを持ったあの一途な生き方、一恵の語気は強くなって行く。
「なぜ、そんな事したの？お母さんに苦勞させないための優しさ？
親孝行のつもり？笑わせないでよ、あなたはお母さんに嘘をついた

のよ、そして何よりも自分自身にもね」

「そんなこと 一恵に関係ないだろ！」

「それは優しさでなく親への偽善・欺瞞よ、嘘はいつでも時と場合があるわ、祐太は一番ついてはいけない嘘をついたのよ！！」

「君にそんなこと言われたくない」

「いいこと約束して、まだ夜間部なら募集間に合うわ、2年後には編入試験を受けてT大やK大に来るのよ！！」

「うるさい！余計なお世話だ、おまえに俺の気持ちが分かるか！！」
祐太は大声で怒鳴った、二人の間に沈黙の風が流れる。

「・・・わかった わたし何も言わない、一つ裕太にプレゼントがあるの、受取ってもらえる？」

祐太は仏頂面して

「な、何だよ」

一恵は手洗い場に来て水道の前に立ちセーラー服の胸から、赤いタオルを出すと蛇口をひねって水に浸した。祐太の方へ振り返ると、タオルを充分絞らないまま、祐太の顔面に投げつけ

「祐太のバカ！ 男だろ シャンとせんかい！！」

これはラグビー部でダレた男子部員への檄であった、

そのまま一恵は校門の外へ駆け出して行く

「男だろ シャンとせんかい、 男だろ シャンとせんかい、男だろ シャンとせんかい」

一恵は泣きじゃくりながら走り続けた、祐太へ高校生活最後のエールであった。

祐太は一恵から投げつけられた赤いタオルを広げると金色の刺繍した文字がある、
朝陽山高校 ラグビー部 守口一恵

文字が怒りとも悲しみとも取れるのか震えているように見える、祐太は帰り道、タオルを握り締めたまま一恵の言葉が繰り返し頭を駆け巡る

「2年後には編入試験を受けてT大やK大に来るのよ」

祐太は夜間の工業大学へ進学し昼は働きながらの通学の生活が始ま

る。

転機（前書き）

洋子は昼のパートから転進を図ろうとする、祐太は編入試験へと進み始める。

転機

祐太が大学入ったその秋、洋子がいつものように夕方ビル掃除をしている、2階廊下にある社内の掲示板が目にとまった

＜英語で簿記の出来る人材募集！＞

試験日は11月20日

科目は簿記用語、試算表、・・・決算書、財務諸表の作成

但し、全て英語で問題が作成され、英語・日本語の両方で解答する。

申込みは人事部 横沢まで 締め切り10月20日

今日は10月5日1ヶ月あまり、英語の簿記用語さえ覚えれば何とかなりそうだ、その時後ろから声を掛けられた。

「お婆ちゃん 久しぶり」

声の主は酒井であった、アメリカからチリと転勤になり日本へ帰って来た。

「酒井はん ご無沙汰してます お元気そうでなによりです、今度は部長へ昇進だそうで、おめでとうございます」

「お婆ちゃんこそ 変わらないね」

「酒井さん チョットお尋ねすんですけど、この募集わたしでも受けさせてもらえますか？」

「確かお婆ちゃん、英検と簿記の資格持っていましたね」

「こんな年でもよろしいので、正社員でもなく」

洋子も40代後半になっていた。

「年齢は関係ありません、仕事がこなせ誠実な人ならOKです、申込みの件横沢に言って置きましょう」

「ありがとうございます、よろしく願います」

この会社は検査機器の商社である、海外進出が始まってより6年この間世界12ヶ国に拠点を作った、と同時に能力主義も採用しパート・臨時でも社員であればチャンスを与えられ職種ごとに給与は変わる、その試験を2年前から実施していた。人事課の扉が開き女子

社員が声を掛けた。

「原田さん　こちらへどうぞ」

「失礼します」

洋子に入ると横長の白いカウンターがあり、そこへ横沢がやってきた。

「原田さん、いま酒井から伺いました、この書類に記入し人事課へ提出してください」

洋子は帰宅したあと、再び簿記のテキストと英文の簿記辞書を読み始めた、祐太が帰って来る。

「お母ちゃん、何始めたんや」

「昼の仕事立ちづめやろ　座って出来る仕事に変えてもらおう思ってたな、でも試験があるよって勉強せんとな」

「そうか頑張ってるや、ところでお母ちゃん、大学の編入試験受けるで、再来年のことやけどな」

祐太は1、2年の大学のカリキュラムは物足りなかった、これでは父のノートを読むことが出来ない、アルバイトをして入学の学費は目処^{めど}がつく、合格以後は奨学金を申請すればK大なら通えそうだ、祐太はこの半年で編入可能な方法を見つけていた。

「そうか　自分が後悔せんようやってみ、お父ちゃんこうも言っってはったで、行動起こさんで後悔するより、行動し失敗して後悔したほうが良いってな」

「あの時のお父ちゃんそうだったのやな、1500時間後に発煙するのを上役の人に言ったこと」

「そうかもしれへん、言わへんでもお父ちゃん済んださかい、けど言った事で、お父ちゃん別の扉が開いたんや」

息子にとっての父親とは最大のライバルともいえるまずは祐太にとって父親に追いつくことである。洋子はK大へ編入は聞いているが、本音はT大ではないかと考えていた、祐二は研修のときT大卒に引けを取らなかった父親に追いつくために。

何も学歴ましてや学校名で人生決まるわけではないが可能性を求め

て行く姿勢は続けさせてやりたい、この春のように自ら土俵を降りてしまう事は二度と繰り返させまい。人材募集に応募したのも採用になればT大へ行っても仕送りが出来そうだ。

それが祐二の妻として夫からよくやったと褒めてくると思っている。親を振り切ってまでも私を守ってくれた亡き夫、祐二は彼女の胸に今も生きている。

社内の試験日になった、希望者は洋子含め15人いた、経理国際課の募集枠は2名、洋子は一番年上である30代前半の人ばかり少し気後れがしそうになった。

試験は簿記用語・試算表・決算・財務表の翻訳作成全て問題は英文である、ここで5名に絞られる。午前中に筆記試験は終わり、昼休み前に合格者の発表がある、経理課長の発表が始まった。

「ただ今より合格者を発表します、1位総務課秋田君98点、2位資材課岩元さん95点、3位・4位、そして5位原田さん89点、以上5名は午後の試験を受けて下さい」

洋子はこの時点で5位にからうじて入った。

午後はカナダ人の試験官と会計用語を用いた英会話のテストである。洋子は時々、訥々（とつとつ）とした会話はあったが、他の4人は流暢に応答した。洋子にとって採用は厳しい状況になりつつあった。10分の休憩後、重役を交えた財務諸表の模擬会議での最終選考がある。ここで洋子に思わぬことが起こる。

大逆転（前書き）

採用試験は午前の部を突破した洋子だが、午後の部での最下位から奇跡がおこる。

大逆転

人事課の担当から案内がある、会議室はコの字型にテーブルが並び中心のテーブルには重役、両脇の右手のテーブルに1、2位成績者が左手のテーブルには3から5位、洋子は末席に座った。経理課長が説明をして行く。

「今から、例題として海外3支社の3年分の財務表をお渡します、30分後に営業・人事・経理の各部長が来ます。それまで、これら表を読んで下さい」

5人はそれぞれ電卓で計算したり、ペンで書込み始めたりした。やがて3人の部長が入って来た、午前とは違う緊張感が会議室に溢れる。人事の横沢が進行役となり、

「既に資料は配布してあるが、3社で最も調査の必要な支社を挙げ、それぞれ意見を述べるように」

3社はA支社・B支社・C支社となっている、Aは業績の変動幅が最も大きい、Bは3年の内1年が赤字、Cは毎年順調に業績を伸ばしている、1位の秋田が口を切った。

「一期赤字のB支社と思います、赤字は企業として避けねばなりません」

2位の岩元は

「変動幅が大きいA支社と思います、安定した成長が企業として望ましい姿です」

以下、討論は続く模擬会議はA、Bに意見が集約しそうな雰囲気である。洋子は戸惑っていた、彼女にとってこのような会議は経験が無い、頭の中が真っ白になっている。

その時、明るい筈の会議室が暗くなっていった、するとぼんやり明るい光の中に人影が浮かび、洋子の隣に座り話しかける

「微分は変化を見つける、積分はその変化の足し算だ、それを回路にするとこうだ」

昔、夫の祐二が口癖のように教えてくれた言葉だった。

「原田さん、原田さん」 横沢が呼びかける

「はっ ハイ すみません」

「原田さんの意見はどうですか」 横沢は洋子に意見を促した

「すみません、私こんな経験ないものですからアガってしもうて申し訳ありません、私はC支社だと思います、確かに業績は順調ですがA・B支社に比べて利益が少ないのが気にかかります」

会議室にざわめきが起こった他の4人の中には、何を馬鹿など嘲笑しそうな声さえ聞こえる、1位の秋田が思わず「あっ」と声を上げかけ口を噤んだ、横沢が終了の挨拶をする。

「これで意見も出尽くしたようです、午後5時に審査発表します会議室に集合するように」

酒井は洋子を昔から知っているだけに黙って聞いていた、意見を言えば、他の部長の評価に影響が出るからだ。能力主義の人事に情実はタブーである。

重役会議はもめた、筆記試験・英会話とも秋田が1位であり模擬会議も高評価であり問題はない、2位から4位はどんぐりの背比べであった。洋子をどのように評価すべきかである、評価は5位だが模擬会議は1人だけの得ている。

この3支社の財務表は数字こそ変えているが実際の支社の例でそれぞれ問題があった、特にC支社には資金流用が発見されたのである、そして酒井がまとめる。

「確かに5人中最下位だが物事の本質を見抜く彼女のセンスは捨てがたい、ここは原田さんを採用でどうか」

結論は出たようだ。会議室に5人は再び集まり、先ほどの同じ席に着席し酒井始め3人が入室して来る、横沢が再び開口する。

「それでは発表します、経理国際課には秋田君、原田さん以上が決定しました」

その後、酒井が今回選考に外れた3人それぞれに今回の講評と今後の努力目標を説明した。

受験者が退出してから、酒井は洋子に声を掛ける

「おばちゃん、これからは原田さんと呼ばないかね、おめでどう」

「ありがとうございます、それで一つお願いがありますよって、ビル掃除を続けたいんですが、よろしゅうおますか？」

「ははは、面白い人ですね、なぜまた？」

「掃除、わたの原点ですよって、初心を忘れないために・・・」

「横沢君、労務規定ではどうかね」

「仕事の兼務は問題ありません、ただビル掃除と経理との兼務は前例がないですね」

横沢は苦笑している。

「そうか問題なければOKだ、経理課長と詳細は相談してください」

「すみません、ご無理申しまして、ありがとうございます」

洋子は一礼をして会議室を退室した。

帰路に着くと西の空に宵の明星がひと際輝いて見える、そういえば祐太が幼稚園の時、お父ちゃん「どこにいるの」と訊かれたときも、

「あの星がそうかな」と答えた事を思い出した洋子であった。

勤務は2日後からになる、昼のパート先は昨日をもって退職を伝えてあった、洋子は後戻り出来ない状態でこの採用試験にかけていたのである。

10 数年ぶりのスーツを新調（前書き）

洋子はスーツを新調にデパートへ、その時祐太とバッテリー会う、祐太は上京へと旅立つ

10数年ぶりのスーツを新調

洋子は10数年ぶりにデパートの婦人服売り場に来た、職場が今までのビル掃除から事務所勤務となると、さすがにGパンTシャツ出勤の通勤は気がひけた。婦人服売り場の隣に書籍売り場がある、視線を向けると祐太がいた、祐太も気が付いたのか

「お母ちゃん こんな所でどうしたんや」

「お母ちゃん 受かったんやで、経理の仕事」

洋子は上気して言った

「おめでどう よかったな」

「通勤の服探してんねん、明後日からお母ちゃんOLやで 前の服もう合わん様になったさかい」

20代は山形のこけしのような顔立ちでほっそりしていた洋子も40代後半になると、ウエストが大きくなっていった。

「お母ちゃんはOLでなくて間にWが入ったOWLや、ウエストがダブルWやで」

「OWLはフクロウや、親に向かってもう少しましな言い方あるやろ」

「フクロウだからお袋、じゃーイギリスの教会にしとこか、ウエストミンスター寺院」

「少しはロマンチックやな、その教会が何でお母ちゃんなんや」

「ウエスト見たらジーンと泣けて来る」

「お父ちゃんも言わんことを、ところで祐太は何してんねん今日授業ないんか？」

「今日は休講やそれで本書いに来たんや、お母ちゃん服買うならこれ上げるわ」

祐太はポケットから袋を差し出した、熨し袋に奨励賞と裕太のバイト先の社名が入っている。

「どうしたんや これ賞金やないんか」

「仕事の改善提案出したらな、今日貰えた」

「そんな祐太が本買おうもって来たんやろ、お母ちゃん受取れんわ」

「本は学校の図書館で読めばいいし、また賞金のチャンスもあるやろ、お母ちゃんの合格祝いや」

「ほな遠慮のう貰うとくで ありがとね」

洋子は丁寧なバッグの奥に仕舞い込んだ、洋子は数枚服を買って二人は帰り道につく。

祐太が大学に入ると親子の会話はすっかり減っていた、祐太は仕事を終えるとパンだけ持って学校へ行く、帰宅してから夕食は午後10時過ぎである、いや高校の2年秋からであらう、帰れば勉強の日々である今も変わらない。今日は久々に夕飯と一緒にすることになる。

「祐ちゃんと夕食一緒にするの何年ぶりかな、こないだ編入試験受ける言ってたや、どの学校や」

「K大かな、ここなら通えるしな」

「祐ちゃん本当はT大と違うんか」

「んーん T大は下宿になるよって無理やろ」

「お母ちゃんに任しとき今日事務の採用決まったやろ、給料あがり掃除の仕事も続けれるさかいに仕送り出来るで、充分では無いかも知れへんけどな」

洋子は胸をドンと叩いた

「わかった・・」 祐太は不安な表情をしている。

「小学校5年の時担任の先生から呼び出された事憶えてるか？」

祐太はただ一度より親が呼び出された事である、絵画のテーマで母親を画くのである。

「先生すみません 何か祐太が間違いでも」

「いえねお母さん、美術で母親の絵を画くのですが、息子さんこんな絵を画いたんですよ、お宅ではどんな家庭教育してるのですか」それはルノアールばりの裸婦像であった

「まー上手に画いて、この子たっらお父ちゃんしか知らん所まで」

「チョット、チョット、お母さん 注意してください」

「祐ちゃん、これではお母ちゃん寒いよって下着ぐらい画きな」
祐太は画き始める

「あらー お母さんはこの様な下着を」

担任の若い女性教師は赤くなるのであった

「担任の先生が女の人やったら良かったけど、男の先生やったらお母ちゃん逃げたくなったわ」

「何でそんな話し持ち出すんや」

「自分に正直に生きや ちゅうことや」

「喩えにしても、もう少しまともな事言えんか、曾子の『君子の道は忠恕のみ』とか」

「お母ちゃん掃除は得意やけどソウシは知らんわ、なーお父ちゃん」
写真の祐二が笑っている。

祐太はこの1年余り後のT大編入試験に合格する。

いよいよ東京へ出発の日、二人は駅のプラットホームで現在では無くなったブルートレインの到着を待つ間、洋子は祐二の言葉を餞はなむけに送った。

「祐太、いよいよやな、お父ちゃん高卒やけど大卒に負けんかったのは前に話したな、T大K大といえど世間ではチャホヤする、学校名が偉いだけで自分は少しも偉いんじゃないで、そこ履き違えると同じ花でも実の無い仇花、虚飾の花になるさかい心しや、名につぶされた人はいっぱい居るよって と お父ちゃん言ってたさかいな」
「わかってる、この2年で自分のやりたい事がT大にあると思うて受けたんやから、学校名やないで」
ルルル・・・ベルが鳴る、

「そうか ほんならお母ちゃん安心や、体気い付けてな」

赤いテールランプが暗闇の中消えるまで洋子はプラットホームに立っていた、祐太は振り返ることなく本を読み始める。

翌日列車は東京駅へ着くと先ずは古い大正時代のデザインの学生寮へ、一歩入ると男の汗やらタバコやらの悪臭でムンムンとしている、

ラグビーの部室もひどかったがそれ以上であった。祐太は早速その晩歓迎の洗礼を受けることになる。

歓迎会そして再会（前書き）

祐太は慌ただしい学生生活となる、又しても意外な人物と出会う

歓迎会そして再会

ステンドグラス装飾の扉を開けると、1畳のスノコが2枚横に並び、木の床を上がると右側に20畳ほどのスペースに穴の開いた応接セツト、傷だらけのテーブル、丸腰掛が20脚ほど部屋の片隅に積んである。正面に腰？の窓が有り、ここが寮管理人の部屋の様だ。その部屋の左は階段、右は長い廊下が続き廊下を挟んで部屋がいくつか並んでいる、左側に食堂兼集会所がある。

「ごめんください」祐太はガラス戸をノックした。

「ハイどなた」歳は60代前半であろうか、白髪混じりの女性が窓を開けた。

「原田祐太といいます、これからお世話になります」
関西訛りで言った

「あんたが原田さんか、荷物はそこに来てますから、それを持って2階の25号室へ入りなさい、この規則はこの壁に貼って有るから読むように」と窓の上を指差した

「すんまへん」会釈して祐太は布団袋と衣類の袋を持って2階へ上がる、鍵のない2人部屋でドアを入れて正面の窓の左右の壁には造りつけの机、その隣は洋服タンスにベッドがある。祐太が荷物を整理していると、先住人の学生が入って来た、

顔を会わすなり「オー！」二人は叫んだ。その学生は福島と云う、高校時代ライバルM高校のラグビー部員で逃げの祐太をよくブロックした好敵手であった。

「原田君やったな、久しぶりやな」

「福島君ほんまに久しぶり、まさかここで会うとはなしばらくラグビー談義に花が咲く、その後福島は

「原田君、またラグビー部に来ないか君の高校の先輩、宮崎さんもいるで」

「宮崎先輩も、ここに居てはるんか」

祐太はめぐり合わせの不思議を感じざるを得なかった。

「先輩喜ぶで、ここんとこ2部リーグで低迷してるんや、宮崎先輩在学中に1部に昇格したいってな、今年が最後のチャンスやからな」寮内にアナウンスが流れる

「今から新寮生の歓迎会を食堂で行います、集合して下さい」

その晩新入寮生15人を含め40人余りが食堂で丸く座ると自己紹介をする、高校とは違いビールがある祐太は生まれて初めて口にする苦い、宮崎が祐太の前に来る

「やっぱり来たな、グーツといけ」 とビール注いだ

「先輩、久しぶりです、やっぱり来たなとは？」

「守口くん知ってるだろ、君は必ずT大に来るはずと、彼女予言してたよ」

「先輩、守口さんは確か女子大の筈でしたが」

「さすがに女子大にラグビー部はないから、応援団に入ってた、わが校の加勢に来てくれることがあるんや」

祐太は一恵と聞いて胸が躍るのであった。高校卒業後の2年彼女とは音信不通である、祐太はあの時、一恵に自分の本心をズバリ指摘され激怒してしまった事を悔いている。と同時に彼女の一言により、こうしてT大の土を踏めたことに感謝したい気も有る、この空白期間に彼女はボーイフレンドの一人は居るかもしれない、いろいろな考えが祐太の脳裏を交錯する。

「先輩、彼女は今何処に住んでるんですか？」

「ハハハ、祐太は守口に追い回されとった、今度は君が彼女を追いか、ラグビー部へ来いよ いずれ会う機会もあるやろ オーイ福島アレやるか、祐太も一緒にな」

あれとは高校時代の部活の後の春歌である。

「エンヤラヤのエンヤラヤの声聞きゃ勇み立つ・・・」

福島が音頭を執る、この様な歌は全国共通のようである、寮生の殆どが合唱している。最後は寮歌で締めくくられ祐太の東京初日が終わった。

3年余り受験やら夜学通学で運動量はめっきり減っていた、祐太は寮と学校の間3kmを走って通学し始める。

祐太は父親と同じ電子回路を専攻するが世はトランジスタの時代からIC時代の幕開きであった、ロジック回路を専攻する、20世紀最大の発明はコンピュータと謂^いわれているその頭脳回路である。

講義が終わると、ラグビーの練習へと走って行く。

秋になり、2部リーグから1部リーグへの重要な一戦の日が来た、対戦相手も1部昇格を目指している、お互い一步も譲らず膠着状態が続く、後半40分残り5分の時だった応援席から

「祐太ー!!!」

どこかで聞き覚えのある声が、一恵の声援だった、祐太は宮崎からのパスを福島と巧みにボールを回しゴールへ飛び込んだ

「トライ!!!」一恵に届く響きをもって叫んだ

これが決勝トライとなり、リーグ昇格が決まった。グラウンドは控えの選手も飛び出し監督、コーチ、主将宮崎の胴上げが始まった、それから応援席のT女子大の応援団へグラウンドから選手が整列して「ありがとうございます」一礼した。

これから両校で競技場の地下食堂で祝勝会が行われ、宮崎が乾杯の氣勢を挙げる。祐太は一恵を目敏^{めびん}く見つけると傍によった、2年の間にめっきり女性らしくなっている。

「守口くん久しぶりやん、今日気のせいか俺の名を呼ぶように聴こえたが、もしかして君の応援の声?」

「やはり聴こえたようね、おぼちゃん声　ウフフ」　と微笑む

「高校の時からグッドタイミングで声援してくれるよな、ところで専攻は何学部?」

「化学よバケ学の方、だけど私の約束守ってくれたよね、どうして」

「君のあの時の言葉と姿がよく夢に現われるねん」

濡れたタオルを顔面に投げつけられた時のことである

「私のこと夢にみるなんて、うれしいわ」

「バケ学だけにその夢は背後霊かも、いや呪縛霊やな」

「相変わらず減らず口たたいてくれるわね、せめて守護霊と言って欲しいわ」

二人の間には2年の空白はなかった様に会話は弾む、しかし祐太と一恵はこの1年後再び離れ離れの運命が待っていた。
その時祐太が一恵に言った言葉は・・・

アメリカ留学（前書き）

祐太はアメリカ留学する、出発の日一恵に告白するのであった

アメリカ留学

祐太が4回生になった或る日、ゼミの教授から呼び出しを受けた

「原田君、今年度の留学で私は君を推薦しようと思うがどうかね、留学先はアメリカM工科大学だ」

M工科大学はコンピューターの最先端の学校である

「先生、学費はどうなんでしょう、母に苦労は掛けられませんので」

「アメリカ留学で我が校推薦なら、学費は勿論、寮などの生活費も返済不要の奨学金が出る、小遣いは出んけどな。但し随時テストがあるから落第点を取ると強制送還になる、君はその心配はまず無いと見たから推薦しようと思う」

「ハイわかりました、それでいつから行くのでしょうか」

祐太は二つ返事で承諾した

「今年の9月になるかな」

とは言え、渡航費と奨学金が下りるまでの費用は準備しなければ、今は4月半年で用意する事になる祐太は学内のバイト募集を探す、すると米軍キャンプの募集が目につまった。

『将校の子息の家庭教師』これだ！

実用英会話の練習とバイト代が入って一石二鳥、早速学務部から紹介状を受取り米軍駐屯地へ向かった。日常の会話は母、洋子が事務の試験を受ける時、練習台としていたから何とか行ける。

受付に着くと守衛のチェックを済まし将校の官舎に来た、このような都内に広大で静寂な空間があるとは・・祐太は驚愕した。

玄関前で中学生位の男の子が数人ボールで遊んでいる、見るとラグビーボールであった。祐太は面談までに時間を子供相手にパスをする、子供の会話が聞き取れない。それでも手振りや表情で話しは通じた。一体俺の耳はどうかしてしまったのかと不安が走る。

母親が帰って来た母子の会話も聞き取りにくい、すると母親は祐太に今度は一転してクリアなキングスイングリッシュで話しかけた、

この家はブラウン家と云う、

「ハジメマシテ ミスター ハラダ」

祐太はブラウン夫人と希望内容を取り交わす、子供の会話が聴き取りにくい原因が解った、テキサス訛りである、また中学生の年齢なるとスラングも憶えるから余計理解できない。

夫人はこの家庭教師で大丈夫かなと疑心暗鬼な表情をしていたが、子供の名はジェイキンという、愛称ジェイが祐太を気に入ったため即採用になる。祐太にはここでアメリカン英語とテキサス訛りを学ぶ一石三鳥になった。

アメリカンホームに子供部屋はあるが寝室用であり学習机は無い、ダイニングルームで教えることになる。また玄関の扉を開けると居間になっており子供は帰ると必ず母親なり家族と顔を会わせる、寝室は子供と両親は別室になっているのも子供の自立心を育むためとしているが夫婦の愛を確かめる方か主のようである。「EOP」

祐太がジェイへ教えるのは物理・数学である分かり易く教えるのかジェイは理解が早かった、規定時間がよく余る。特にアインシュタインの相対性理論と浦島太郎の関係を話しているとジェイは目を輝かした、

「助けた亀は宇宙船やで、その中に竜宮城があつてな、地球時間で1年間光速で飛んだんや、帰ってくると地球は50年後になるんや、太郎はこうして50年後の地球に着いてしもたんや」(注 筆者はテキサス訛りを関西訛りで表現しました)

夫人はこんな家庭教師大丈夫かと当初考えていたが、ジェイの成績が上がるにつれて目を細めた。

ブラウン家へ通い出してから或る夏の日、夫人よりホームパーティーにガールフレンドも一緒にどうぞと招待された。

その時父親が帰宅して来た、空軍の将校で階位は中尉である名をエドワードという。息子ジェイはお帰りの挨拶を「Yes Sir」と敬礼をする、祐太もいつしかジェイと同じ挨拶をする様になっていた。中尉は祖父の代のイギリス移民でありラグビーファンで祐太

と話が合う、夫人の申し出に夫も賛同し祐太は招待を快諾する。
祐太は寮に帰宅すると、早速一恵に電話をする。

「もしもし T女子大寮ですか？ T大の原田と申します、守口さんをお願いします」

「原田さんですね、少々お待ちください」

守口さん電話でーす と 館内放送が電話越しに聞こえる

「すみませーん」一恵は小走りで駆けて来る

「3分以内で切るんですよ」

寮母は電話の隣に砂時計を置く、女子寮は規則が厳しい、特に男性からの電話は長電話になり易いから特にである。

「お待たせ、どうしたの急に」

「次の土曜日、バイト先でパーティー招待されたけど、ガールフレンドも一緒にだって」

「バイト先って、米軍の？面白そうね付き合うわ」

一恵は祐太から米軍キャンプの事は聞いてはいるが、アメリカの家庭を實際見る事にワクワクした。

当日、祐太等は京菓子と抹茶を用意する。食器棚に使われた形跡のない茶の道具を以前見たからである。

ブラウン家の前に来ると一恵は「ちょっと待って」祐太のネクタイを直す、そして祐太はチャームを押すキンコン耳に軽やかに響く、ドアが開いて夫人が出迎え、祐太は一恵を紹介し夫人は一恵に「ようこそ」と軽くハグをした。この後5組の家族が入ってきた、

夫人の手料理が出され会話が弾んで行く。

一恵はこれがアメリカの家庭なんだテレビで見るのと同じ、当時の日本の夢見た家庭なのかと夢心地になった。

ここで主人のエドワードより思いがけない発言がある

「皆さん注目、改めて紹介します、ジェイの家庭教師のミスターユウジ ハラダ この秋あのM工科大学へ留学する青年です」

オー と歓声が上がリ拍手の祝福を受けた、祐太はこのパーティーはブラウン家が祐太のため開いてくれた事を知った。夫人が一恵に

そつと耳打ちする

「祐太を離しちゃだめよ、サー隣に行つて」

「ありがとうございます、まだまだこれからですが皆様の期待に応える様頑張ります」と、感激に声を震わせる。

その後祐太と一恵は肩を寄せ合つた。

一恵は茶道具を借りると用意をしてきた茶を点^たてブラウン家族はじめとして振舞い、その嗜^{たしな}み方も教える。夫人は一恵を気に入り、その後も招待を受けるようになった。パーティも終わり帰る時、夫人は野外ステージでショウがあるから寄つてみたらと案内された。どこかなと周りを見回すと、一恵は「あの明るい場所がそうじゃない」会場は扇型になっている、要部分^{かなめ}にステージがあり観客の兵士が数千人座つていた、二人は後方からステージを観るとテレビ、ラジオで人気の双子の歌手始め有名なタレントが出ている。

「一恵、門限に遅そうやから そろそろ帰ろうか、今日は付き合つてくれてありがとう」

二人はキャンプ地を一步出た、夢から現実の世界に戻つた錯覚を一恵を襲う

「ねー祐太 私たちこれからどうなるの？ アメリカ行つたら逢えないよね、あの天の川の牽牛、織女のように一年に一度しか逢えないのそれすら無いと、わたしの天の川は涙の川になつてしまふわ」
二人は夏の空を見上げる

「冬になるとオリオン座が出るやん、オリオン座と同じ配列の建造物、何か知ってる？ エジプトのピラミッドや、君がオリオン俺はピラミッド、君に対する思いはピラミッドの様に動かない」

「だと いいけど・・・」

「愛をアルファベットの小文字で表すと、『i』になるや、これつて数学の単位で虚数やね」

「そう『i』は二乗しても－1にしかない、あれっていったい何なのと思つていたわ」

「ところが電話の回路設計には必要になるんや、あるけど無い、無

いけどある」

「鏡に写る像の样ね」

「そうや だから電話の告白は『i sh tel』となるんや」

「コラ！ 人が真面目に話してるのに、いつもこうなんだから」

一恵は呆れ顔をする、祐太に限らず「愛してる」とこの時代の男性は言い辛かった、寧ろ女性には「黙って俺について来い」と言ったものである。現代なら男性がこの様な事を言えば、女性は何処へ連れて行かれるか分かった物じゃないと考えるだろう。

やがて祐太の渡米の日がやって来た、一恵と共に横浜港に向う電車の中も無言のまま立っている、一恵は港に近付くにつけ泣くまいと自分に言い聞かせていた、祐太の門出なんだから・・・と

乗船のアナウンスが流れる、祐太は一恵の手を両手で握り

「一恵、手紙を書くから5年いや4年待ってくれ、必ず迎えに行く・約束する」

「待っています・・・」一恵は小さく呟いた。

祐太は船に乗ると、デッキまで走って行く、出発のドラが鳴る

「一恵 好きだー 愛してる」手を振りながら言った。汽笛に声はかき消される、一恵は祐太が何を言っているのか分る、初めて祐太からのラブコールであった、船が地平線と宵闇に消えるまで一恵は栈橋に佇^{たたず}んでいた。

一恵の卒業（前書き）

一恵は卒業し、二人の遠距離恋愛は文通になるも、4年後祐太の元に一恵より電報が届く。

一恵の卒業

話しは現在に戻る

「部長はん、これが祐太が留学する時の手紙ですねん」

洋子は酒井に手紙を見せた

『お母ちゃん 僕は9月よりアメリカ留学する、奨学金が出るさかい仕送りはもういいで、これからはその分 お母ちゃん自分のために使ってや 祐太』

読むと酒井は言った

「これで祐ちゃんはおばちゃんの子供でなくなったね、鳥で言えば巣立ちになるのかな」

「ほんにそう思いますわ、それまでの手紙は金送れ ばっかりで」
洋子は苦笑いをする。

祐太は渡米してからは毎週のように一恵に手紙を書き続けていた。
半年過ぎると一恵が卒業式を迎える、祐太の卒業祝いの手紙は

「卒業おめでとう お祝いの言葉の代わりに、詩を送ります

『学び舎の乙女にとりて

青春の如何にすみやかにすぎくことぞ

彼女をめぐる若人ら

つねに新しき激情に燃え

ひたすらに逸樂を求めゆけど

彼女のみ かそけく 心樂しく孤独に生きぬ

そはひとり 貧しき部屋の机によれば

胸うちに炎は燃えて

はろばろと心は高く広げばなり』

これはキュリー夫人が卒業時に詠んだ詩の前半です、僕が君を迎えに行く時が来たら後半を贈ります。 オリオンの一恵へ

祐太」

一恵の返信は

「ネーネー 卒業式ですごい事が起こったのよ、総代の答辞でね祐太が書いてくれた、キュリー夫人の詩が詠まれたのよ、私、感動しちゃった。素敵な詩ですね、後半の贈られる日を楽しみにしてます。

ピラミッドの祐太へ

一恵」

祐太は入学後、百科事典もある厚さの本を週何冊も読みレポートの提出、ゼミの研修、実験の日々が続く、一恵への手紙も週1回から月1回、時には数ヶ月途絶える事もあった。

アメリカに来て3年が経った、祐太の研究室にあのブラウン中尉がやってきた、本国転勤までに中尉は少佐に昇進している。

祐太の研究テーマは通信である、後のインターネットとなる基礎ロジック回路設計である、これに軍が注目していた。家庭教師をしていた以上にブラウン家と親密になって行く。

4年目の或る日、一恵より電報が来た

「6月3日に私は見合いをします、今まで断ってきたけど父が今度ばかりはダメと言っています、祐太とはこれでサヨナラかも お元気で 一恵」

一恵も26才になろうとしている、3歳年下の妹も去年嫁いだ、この時代は女性の結婚適齢期は25歳までが社会通念であった、この年齢を過ぎると『行かず後家』と揶揄やゆされたものである。

祐太の胸の中に激しい嵐、彼女を失う言い様のない虚脱感、淋しさが去来する、何度も読み返す。こうしては居られない、

今日は1日、明日の飛行機なら間に合う便の時刻表を探す、ここで祐太は意外な落とし穴に気付く日付変更線が存在だ。

西回りになると明日出発では日本の到着は4日になってしまう、今日出発の便はもう間に合わない。

ブラウン夫妻（前書き）

祐太が一恵を失う絶対絶命のピンチを救ったのはブラウン夫妻であった。

ブラウン夫妻

祐太が思案している時電話が掛かった、こんな時に何だろうと受話器を取るとブラウン少佐からであった。

「ハロー祐太、直ぐこちらへ来てくれなにか緊急だ、車が迎にそちらへ行っている」

有無を言う時間もなかった、車が来た余程のことに違いない。猛スピードで走り基地に到着し少佐の部屋に入る。

「よく来てくれた、すぐ会議室へ行こう」

少佐は会議室に祐太を案内する、部屋には5人スタッフがいて黒板の細かな数式をみて議論していた。祐太はこの事なら教授を呼んだらいいのと思ったが、教授は海外出張であった。祐太はこの式を見ると

「これは、飛行物体の航行軌跡の式ですね」

「そうだ、しかしこの式でシミュレーションすると上手く行かない、この通りだ」

祐太はモニターを見ながら、数式の結果を頭の中でイメージした。時間が刻々と過ぎてゆく

「ここの固定数を変数として、このように式を変換すればどうでしょう」

祐太は式を書きコンピューターに入力する、結果がモニターに表示され予想とおりの結果となった、会議室に歓声が上がった。

少佐は

「急に呼び出して悪かった、私の部屋でお茶でも飲んで行き給え」

「ありがとうございます、ところで少佐ご相談ですが・・・」

祐太は一恵の件で、何か方法は無いかと藁をも掴む思いで訊いてみた、少佐は応える。

「君の気持ちは分った。祐太、先ほどの式は頭に入ってるかね」

「一字一句、間違いなく憶えてます」

「そうか、その式を日本の横須賀基地にいるカーリー少尉に伝えて欲しい、今から1時間後に立川基地にいくジェットが出る、それからヘリコプターで横須賀へ行けばいい」

少佐は書類を引き出しから取り出すと、サインをして祐太に渡した。部屋を出ようとすると少佐は

「祐太、ミス一恵を必ず一生幸せにするんだぞ、グッドラック」

祐太は振り返り家庭教師をしていた時期の様に「Yes Sir」と敬礼した。

「少佐ありがとうございます」

祐太の記憶した式を無電で送ることも出来る、暗号化してもいつか解読される。人の頭の中を見ることは出来ない、あの式は軍の配備位置まで予想できる機密事項であり、祐太はそれを知る由も無い。

祐太は少佐の計らいで3日の朝、日本に到着出来たのである。

4年ぶりの日本の景色は都市を中心に大きく変化していた、高度成長期の真っ只中である。

立川基地には朝7時に到着した、これから横須賀基地へ移動しカーリー少尉に記憶した数式を伝え、オペレーターが入力し動作を確認しOKのサインを出した、少尉は「グッド」と右手の親指を立てた。オペレーションルームを出る時少尉は

「ミスターハラダ、ブラウン夫人より依頼品があります、これをどうぞ」

小さな箱に封筒が祐太、一恵宛2通添えてある、祐太が基地を出ると時計は午前9時過ぎになっている。一恵の見合い時間は午後3時、場所は神戸のRホテルであった。横須賀駅、横浜、大阪と乗継ぎ神戸の駅には午後2時半を回っていた。

駅でレンタカーを借りてRホテルへ向う、英国風の回転ドアの玄関を入りロビーを見渡す、正面のフロントに進むと左側に8人のグループを発見する。いた、祐太は一恵の元に走ると

「少し失礼します、一恵さんにお渡ししたい物があります」

一恵は突然祐太が現れたのに仰天し「アッ」と叫ぶなり、

祐太は一恵の手首を握りホテルから連れ去ってしまう。一恵の両親はじめ、見合い相手の人々は何事が起こったのかと呆然と立ちすくむのであった。

二人は行く当ても無く車を運転し回るうち、母校の朝陽山高校に来ていた、東側には城があり内堀の前にあるベンチに腰掛けた。城の壁を夕日があたりオレンジ色に染まっている、一恵は

「いったい どんな気よ 今までほっといて」

一恵は4年間、揺れ動いていた自分の心境を祐太に告げる、告げると言うよりなじるに近いかもしれない。祐太は黙って聞いている、一恵が思いをぶつけ終えると祐太はそっと彼女を抱きしめた。

「でも、来てくれてうれしい それで私に渡す物って？」

ここで愛のベールを、と言いかけたが今の状態では一恵に張り倒されるだろう、ブラウン夫人の封筒を出して一恵、祐太はそれぞれ開けて読み始めた、現在では利用されていないテレックスの電文が入っている祐太の内容は

「祐太へ カリー少尉から受取った箱を一恵さんに贈ってください、鳥でもプロポーズの時は餌を雌にプレゼントするものよ、幸せ祈ります」

一恵へは

「親愛なる一恵さんへ あなたの元へ無事届いたかしら、あなたへのお祝いのプレゼント 幸せを祈ります」

ブラウン夫人は夫エドワードから祐太の状況を聞くと横須賀基地のカリー少尉へ依頼していた。一恵は箱を開ける中にはティファニーのペンダントであった、夫人は祐太が渡米した後も自宅へ一恵を招き彼女の好みを把握している、一恵は感激し笑顔になった。

心を形にとはこの事か、祐太はお歳暮のキャッチコピーを思い浮かべながらブラウン夫妻の粋な計らいに感謝した。祐太は俺からもプレゼントを、と、キュリー夫人の詩の後半を語り始めると一恵も一緒に

「さわれ、喜びの月日は消えて

彼女今科学の国を去らんとする

灰色の人生の行路に立ちて

生活のパンを得るべく

されどまた心悩みに閉ざさるる日は

つねにつねになつかしき心のふるさと

かの屋根のもとに帰りゆかん

そはひそやかに、励み努めし日なり

思い出のいまもなおとどまる地なり」

(注 白水社 キュリー夫人伝より引用)

語り終えると祐太は

「遅くなっただけ、迎へに参りました」

「ありがとう、キュリー夫人の詩確かに受け取りました」

「このままでは君の両親にすまない、これでは略奪婚になってしまう、アラブの世界では儀式としてあったらいいが」

「それもいいわね、女性としては感激でしょうね」

「中近東は結婚の儀式は歴史があつてな、新婚旅行をハネムーンで言うのも古代メソポタミアの時代、満月の夜に新婚旅行に出発し、童謡月の砂漠はこれをモチーフにしたんや」

「わー ロマンチック」

「千夜一夜物語はもっとロマンチックやで、プロローグは知ってるやろ」

「王が一夜を共にして氣に入らないと殺してしまうところからよね、頭のいい女性が話しをして幾夜も過ぎす」

「そうアラビアンナイトとも言われるが、これは『あら いやーん ないと』やで」

「祐太は夢心地なのに、いつもぶち壊すわね」

一恵は苦笑する、その後父親へ電話をした、電話口の向こうから

「なにをしてるんだ、直ぐ帰って来い!!」

当然両親の怒り心頭であつた

守口家と原田家（前書き）

一恵の両親にあうため彼女を家に送った祐太は

守口家と原田家

祐太と一恵は門を通り敷石を歩き、恐る恐る守口家の玄関を開けた。時間を数時間前に戻そう祐太が一恵を連れ出した後、一恵の父は仲人から

「守口さん 一体これはどう云う事ですか」

「どうも娘が不始末して申し訳ない、一恵は貞操にやや脆弱性があります。それがそれ以外は概ね良好でして・・・」

と、わけの分らない言い訳をしている。見合い相手の両親から

「そんな、ふしだらなお嬢さんとはお付き合いはこちらからごめん蒙ります」

怒って帰ってしまった、一恵の母親は

「お父さん、一恵の事をここまで言わなくても、あの子の結婚どころか見合いの話もなくなりますよ」

娘は父親に性格の似た男性に好感を抱くのであろう、一恵の父親は祐太と同様に冗談を飛ばすようである。

一恵は「ただいま、お父さんすみません」

父親は玄関の上がり框かまちに立ち怒鳴る

「バカモノ 一恵を置いてさっさと帰れ」

「お父さん祐太さんを許してあげて、お願い」

「だめだ、絶対許さん！」

「じゃー私このまま、祐太と出て行くから」

一恵は涙ながらに父に訴える、祐太は

「一恵さんそれは駄目だ、ご両親に祝福を承けて一緒になろう」

祐太は駆け落ち同然で家を出た母の苦労を背中で見えて来た。

「どうして、私を愛していないの」

「僕は一恵を幸せにするためここに来たのだから、駆け落ちと言っている君なら僕はここで失礼して帰ります、君を愛してるから不幸にしたいくない。お父さん数々の非礼をお詫びします」

祐太は頭を下げ踵^{きびす}を返し玄関を出掛かった。二人のやり取りを聞いていた一恵の父は

「原田君だったな、二人とも上がりなさい」

二人は和室のテーブルがある仏間に入る、祐太は正座をして「改めてこのような失礼をお詫び申し上げます」

二人は並んで父親に両手を畳に付け頭を下げる。

「それで、この不始末をどうする気だね」

「一恵さんを私に下さい」

「このような事して娘と結婚したいと、ハハハ」

父親は突然笑い出した

「おい母さん、一恵の言った通りやな、残り5分の男だと」

「ほんとうに、そのとおりで ホホ」

両親は来た時と打って変わり笑顔になっている、残り5分とはラグビーの事である。祐太は

「残り5分の男とは？」

「あと5分遅かったら、わし等はあのホテルのどこかで会食する予定じゃった、祐太君とやら君は風林火山やな」

すると一恵が

「そうよ、この人は私を迎えに来ること風の如く、時期を待つて徐^{しず}かなること林の如く、私の手を取って去ること火の如く、私を愛してくれる事、山の如しで動かないもんね」

「さすが一恵が惚れただけのことはある、母さん、一恵、我が家のVIPに食事とビールの用意を」

祐太は大学の研究所の勤務が決まり、一年後、祐太一恵はロスアンゼルスで挙式した。しかし、帰国後は日本での住居は一恵の実家の近くである事が守口家より条件が出されていた。

話しは最初に戻る、

川沿いの街路灯にあかりが点り始めた、

「酒井はん こんなわけで祐太は出てしまったんや」

「おばちゃん 祐太君には祐太君の人生があるものな」

「それは わかってんやけどな、部長はん愚痴言ってすんまへん、
そうそう奥様のデート遅れまっせ」

酒井はベンチから立ち上がり、橋に向かう途中振り向いて

「おばちゃん 親は1日とも子供のこと忘れませんが、子供は時々
は親を思い出すものです」

洋子は酒井に一礼して、腰にぶら下げてあるラジオのスイッチを入
れると「おばちゃんのブルース」が流れてきた。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1471q/>

おばちゃんのブルース

2011年9月4日00時15分発行